特 別 講 演

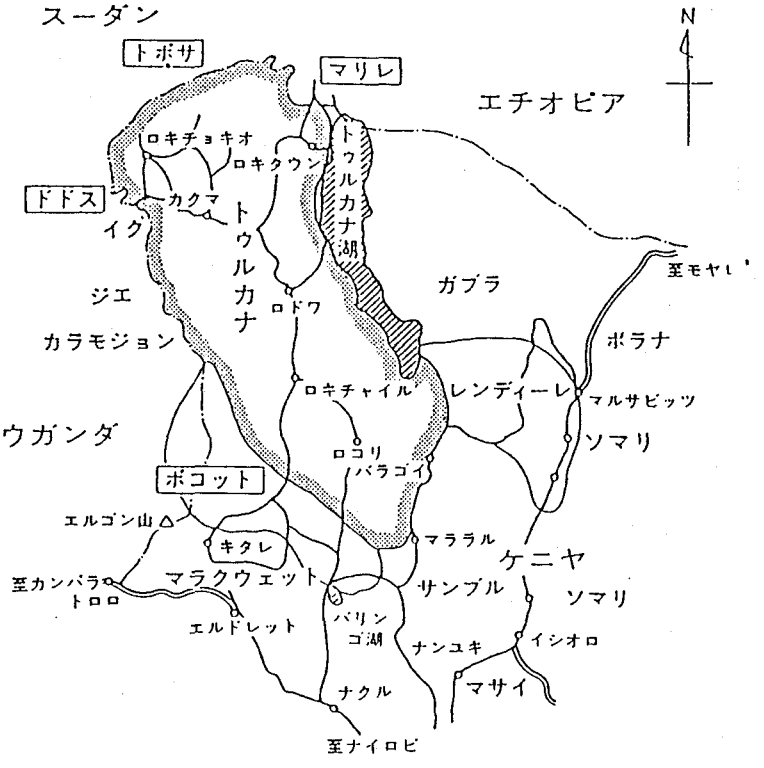
遊牧社会と旱魃—ケニア北部の事例—

京都大学アフリカ地域研究センター
センター長 理学博士 伊 谷 純一郎

Junichiro ITANI

ケニアの北部は，年間降雨量400㎜以下という半砂漠地帯が広がっており，ここでは農耕はできないため，牧畜が主生業になっている。私たちは，1978年からこの地域で生態人類学的な研究を続け，遊牧民5部族を手がけてきたが，ここではトゥルカナについて，とくに1980年の苛酷な旱魃時の人々の生活に焦点をあててお話しをしたい。

トゥルカナは，トゥルカナ湖西岸からウガンダ国境までの約6.7万㎢をテリトリーとし，16〜18万人の人口をもつとされている。



トゥルカナのテリトリーとそれをめぐる諸部族

□は1980年当時トゥルカナと戦闘状態にあった部族

0 100 200 250 km

彼らは，山羊，羊，牛，駱駝，驢馬の5種の家畜を保有している。駄用である驢馬以外は乳用家畜で，人々は乳を主食としている。これらの家畜はそれぞれ習性を異にしているので，同じ場所で飼養することはできない。それぞれにとってもっとも好ましい地域で遊牧するのが望ましいわけで，家族成員を分けて各畜群を担当させている。

トゥルカナの社会は，父系拡大家族が単位になっており，それは家畜所有の単位でもある。1978年は緑に恵まれた豊かな年であった。私たちが研究の対象にしたR家は，家族成員を4つに分けていた。家長が住むメイン・キャンプは25人からなり，山羊を主としていた。3つの衛星キャンプがあったが，羊のキャンプには5人，牛のキャンプには29人，駱駝のキャンプには3人が配置されていた。驢馬を除く4種の家畜の総計は1,272頭，これを家族成員62人が管理していたわけである。

メイン・キャンプは，低地のもっとも暑い盆地の底で，大河に沿って小さな移動をする。羊と駱駝のキャンプは，そこからあまり遠くない地域を遊牧するが，牛牧キャンプは北方のスーダン国境と西南のウガンダ領内との間を往復しているので，メイン・キャンプから100Km以上離れることも珍しくない。牛牧の衛星キャンプの年間の移動距離は500Kmにもおよぶ。牛をこの上なく愛するというのは，中央ナイル系の人々に共通の特性であるが，トゥルカナもその例外ではない。

第1回調査の翌年，1979年11月の小雨季には雨が降らず，続いて1980年の前半の大雨季にも雨がなかった。5月にはコレラが流行して多くの人が死んだ。そして8月には，すでに羊と駱駝のキャンプはメイン・キャンプに吸収され，衛星キャンプは牛のキャンプだけになっていた。旱魃というのは，地震や洪水などのような突発的災害とは異なり，毎日雨を待ちながら，気がついたときには深刻な事態に陥っているといった災害である。まず幼獣が斃死し，子を失った母畜の乳が涸れ，人々の主食が絶たれ，元手である家畜を屠って肉を食べる以外にないという事態に追い込まれる。平常時には肉のために家畜を屠るということはまずないのである。肉の消費量を推定した結果は，1人1日当たり200gm となったが，何も口にしない日が多く，離乳直後の子供の餓死が目立った。

この旱魃に対して，人々は何の方策をももっていなかった。ただ，1978年の家畜数と，1980年のそれとの比較によって，彼らがどのようにして元金に手をつけていったのかということを知ることができた（表1）。彼らはまず羊から手をつけていった。つぎに，旱魃にはもっとも強いはずの駱駝を屠り，最愛の牛の温存をはかった。

Table 1. Number of livestocks possessed by R family in 1978 and 1980

	goats	sheep	camels	cattle
September 1978	625	360	72	215
September 1980	339	26	30	151
remaining (%)	54.2	7.2	41.6	70.2

駱駝はトゥルカナにとってもっとも新しい家畜だと言われている。駱駝だけは，旱魃のさなかにも乳を出していた。トゥルカナ湖対岸の駱駝遊牧民レンディーレやガブラはトゥルカナほどの悲惨な被害を受けていない。これらのことからすると，トゥルカナは自らの牛への愛情の故に，対処を誤ったといわなければならない。すなわち，もっとも頼るに足るものを先に消費してしまったのである。

R家の1人当たりの大家畜と小家畜の数は表2に示した。1978年と1980年の数の差は，彼らがこ

Table 2. Number of livestocks per man in R family

	small animals	large animals
September 1978	15.88	4.62
September 1980	6.08	3.01
(Gulliver's data)	10	3-4

の旱魃を耐えるために消費した家畜の数と考えてよい。しかし，R家は平均以上の裕福な家族であったから，このようにして耐え得たのであるが，1人当たりの大家畜10頭前後，小家畜2～3頭程度しか持っていなかった家族は，ことごとく牧畜を放棄する以外にはなかった。その多くは，町の難民キャンプに身を投じたが，一部の人々は山の中に入り，狩猟と採集の生活によって旱魃をしのいでいるのを確かめている。

より多くの家畜を保有しているということだけが，この旱魃を耐え抜く彼らの唯一の方策であった。莫大な数の家畜によって支払われる婚資，近隣諸部族との間の家畜略奪の応酬など，より多くの家畜を保有しようとする慣習は，彼らの唯一の自衛と深い関係があるように考えられる。